

ふっふっふ。

「どうしたの？」

私のことを知っている人がいるとするのならということですよ！

「ま、まさか！」

その場傘。

「何を言っている！ 貴様、許さんぞ！」

時々そんな言葉がはやるんだって。

「何を言っている、流行病を知っているだろ？」

うるせい。我のことを思い出したのはここはドイツだ。

「意味わかりません」

解ってくれませんか？ なら三十円ほど出しますので。

「意味わかりません」

じゃあ、始めましょっかね。

「まてえい！」

とりあえず。

「うん。僕は何も聞いてないの」

いやいや、そんなことを聞いた覚えなんて何もないんだよ？

「それは大きなあ。ビックになるちゃんだね」

いや、スモールの方がきつとあなたには似合うのよ。

「待てまた。私の意見を聞いてくれないと、お屋さまに突撃よ？」

ふっふっふ。

「またその笑いを」

だって、いつも笑っていることがあの人には嬉しいって言ってくれたじゃない。

「なによ？」

おいらはいつもおじいさんを追いかけていたの。支柱に克！

「漢字間違いはいけないぞ！」

おいらはいつもおばあさんを追いかけていたもの。術中にはまったな。貴様あ！

「私は、わたしはあ！」

いつも意味踏めないことはわかるけど、きつとねお屋さまが輝いているのよ。だからあなたにも伝わるかと信じていたことが今でも覚えているのよ。

「だって、それが嬉しくて。いつものように楽しんでいただければという言葉がいつものように続けばいつものようになれるのに」

いつもいつもいつもうるさい！

「涙を流すのは今でも思い出せるんです。だって、だじえを知っているんだから」

きつとね、お星さまがあそこから天使として見渡しているの。それだけはわかってあげて。嫌だよ。お姉さんが僕のポケットから現れたのが今でも嬉しいんだから。だけど、だけど」

「そんなことは知らない間に終わっている。それが私には耐えられない。だけど」
ひっそりとした感情はいつも涙を流すことに一生懸命。

「私の答えを零したその口は今でも覚えている」

どこか遠くに行きたいんだと知っているから。

「私のことを覚えていてほしいから。だから、今から始まる物語は」
フィクションです。その他人生に関することはこれからはじまるのです。

「きつとね、と言ってしまった時のようなことを今でも覚えている」

そう信じて笑ってしまった時を覚えているのなら。

「今からでも遅くない。これから行けば間に合う」

そんな気がしてならないのだ――。

「私は信じているから」
だから。

「ありがとう榎場させてしまった私を許してください」

あなたを亡き者にしてしまった、そのことを許してください。

「いつも、いつも」

だじえ。その言葉を思い出したくて、これから始まっている。

「そのことが、いつものように反響する」

その声をいつしか聞いた気がして。笑ってるような表情を。

「いつまでも続いてほしい」

そう信じている。

きつとね、あなたが知っているのは友達なの。

「いきなりどうした」

感情が昂るのはいつものことよ。

「知らない」

うつふつと笑って見せてよ。

「嫌だもんね。僕はトイレットペーパーを握っている少年だもんねえだ」

良かった良かった。トイレに行くんだね。僕もついていくよ。

「ダメだ出目だ。出所はトイレットに行くことだ！」

まるで意味わかりません。

「全く、だから日本人はダメなのよ」

何の話!?

「いやいや、知る限りのシルフェイドを知っているわけじゃないじゃない。だからなのよ」

「いやいや、ログハウスには誰にも聞こえない恐ろしい病院があるのよ。そこからはお化けが出てキヤー!」

「一人で何昂ってんのよ」

だって、だってえ!

「あなたが知っている事実は私にもわからない。その事実があなたを地獄に突き落とし、師へと導いた絵クリスと呼ばれたひとがそこにはいました。だって、知っているからと言いなながら」
それは著作権侵害問題にならない?

「それでも絵く知るは言いました」

名前がおかしいのは最早デフォですね。

「私が畏怖する天使様ですと」

それもいろんな意味で危ないでしょ。

「いつも笑っているあの人は今どこにいますのでしょいか。今でも素晴らしい世界を創るために、頑張って魔法を操って、コンピューターを使って、狭い背境の中で一生懸命頑張っています」
それはただのひきこもりでしょ?

「だけど、覚えている。いつも言っていたあの言葉を今でも思い出します」
一人でいつも笑っている不気味な姿は、月の輝きに打ち消されました。

「今でも対抗呪文を抱いている。そして笑った」

いつもその輝きは、忘れられない。

「そして、これからも、失わない事実に乾杯をしたいと」

つよく、そう願っている。

「それが大変な事実だから。いつものように、いつものように」

笑っている？

「泣いている？」

私は覚えている？

「だけど泣いている」

覚えてない事実はどこにもないけれど。

「どうにでもなっただけという、答えはもうどこにもない」

いつしか、忘れ去られた時が来た。

「その時私は何をしていたんだろう」

私は覚えている。だけど、どうしようもない苦悩と余るグールが襲う。

「それはいつも何かをしていた。それはいつも笑っていた。教会の中で私は一人苦悩する」

そして答えは出なかった。

「天使様は微笑んだ。私を連れ去っていくのですね、と私は思っている」
嬉しくて。哀しくて。憐憫と哀楽の感情は共に動かしている。それでも笑っていてほしい。

「だから、共に行きたい世界の中で、天使様とお星さまにお願いをする」
どうか、私を癒してくださいませんか？ と。

「天使様は微笑んだ」

良いわよ。なら、一緒にこの腕を抱かないといけないんだと。

「私は笑った。いつものように笑えた。どこか遠い地平線を見て感動したあの時のことを今でも覚えている」

そして、私は忘れていく。この現世のことおw忘れていく。

「いつも、何かを失っていることにも気づいている。だから、もう、終わりなんだと」
いつか、私が夢見ていた世界に私は行くだけ。

「さあ、行きましょう」

私は天使に手を引かれて。

「共に空を飛んだ」

さてと、涙を流したことだし。

「ましー」

だしてしょ？　せめて面白おかしく存在意義を示しなさい。

「ましー」

なんでそんなことを言うの？　わすいは和水町だよ？

「ましー」

ひとりで話しているのが馬鹿らしくなるからやめなさい！

「ましー」

ええ、ちがうのお？

「ましー」

ちよつと、いつもこの格好だったらおかしいでしょ？！

「ましー」

いつものように答えてよ！

「マシなもんを寄こしな！」

あ、答えた。

「ましー」

何が言いたいなのよ！

「ましー」

じゃあ、勝手に始めよ。いつものようにトイレットペーパーを、

「ましー」

していたらいつものように、涙を流している少年がいることに気が付きました。

「私はいつもましーと呼ばれる存在。十回ぐらい言ったから良いんじゃないね？」

涙を流すのもそこまで所！

「よ？」

好いや違うんだ。私は好々爺のおっさんに真実を継げたのよ。恐ろしいほどまでに顔を青褪めたおじいさん。

「好々爺は気持ち悪いと誰もが言っていたんだから。私はいつものようにましーを言ううだけ」

うるせい！ 私は自分のことを信じている。恐ろしいほどまでに答えを知っているトイレットペーパーを知っているから。

「涙を流すのはましーのせい。私は一人夜空を眺める」

星が綺麗だった。

「それでは歌っていただきましょう」

ロリキタで「君が星になった日」

「ちよつと待て」

どうした？

「ましーを言わせてくれ」

なんで？（含み笑いをしているとされる）

「なんで、それを言う」

何かあったのか！

「ましー！」

著作権なんて……信じない。だから行くのさ！

「ましー！」

夜空が綺麗だったこと今でも覚えているから。

「そして、最後の映画はここで終わる」

いつものように世界の中で遊んでいた少年がもう笑うことがないんだと。

「それが全てだったんだ」

私は涙を流す。

「それは全てを知っていた。そしてこれからもずっと」

過ぎ去った季節は終わらない。

「それだけ、自然の偉大さに勝てないのだと」

そう信じたから。

「妖しげな月の光が突き刺す、教会の中で」
私は一人、神に祈りを捧げていた。